後藤先生の記念講話をお聞きして、特に心に響いたこと

2024 年 3 月 9 日　生形　章

① 道徳授業地区公開講座について

＜道徳授業地区公開講座がその絶好の機会だと私は思っています。年に 1 回徹底的に教材研究を行うことを 5 年続ければ、相当力が付くはずです。10 年続ければ足腰のしっかりしたブレない道徳授業ができるようになります。年に一回「基礎を磨いて、理解を深める」ことを繰り返せば、必ず上達します＞

私は今年度、道徳授業地区公開講座で学校へ行くことが増え、同じ学年３クラス同じ教材、同じ学習指導過程の学校がなんと多かったことか・・・。

そんな学校の校長先生に「道徳科授業への理解と指導力を高めるために年に一度の絶好のチャンスを活かすこと」についていろいろと話してきました。

上記の後藤先生のお話は「我が意を得たり」と心に響きました。

私ひとりの力ではどうにもならないと思っていましたが、５年後、１０年後に期待し、これからも地道に学校へ話をしていきたいと決意しました。

② 道徳部の使命について

＜多くの研究会は、新入会員のニーズや実態の把握を怠り、手を打たなかったところに落ち度があったと思います。つまり、「道徳のイロハをイから学びたい」と入ってきた教師がたくさんいたという実態です。＞

道徳科が始まる前「急に部員が増えて・・・」と喜ぶだけで、何も努力しなかった道徳部は絶好の Chance を活かすことができず、本当に残念だと私は感じていたので、上記の後藤先生のお話は心に響きました。

道徳部は、道徳の指導について深めることだけでなく、もっと「広める」ことに力を入れなければいけないということは、「道徳の時間」の時代から言われていたことだと思います。

道徳部は「道徳が好きな仲間（仲良し集団）」ではないことを再認識すべきだと強く思います。拝聴していた道徳部担当校長や講師に招かれることの多い我々の責任も大きいと感じました。

③ 道徳科の研究方法について

＜若者とかベテランとかの区別なく、授業者はそのキャリアに応じた指導観をもって授業に臨み、その授業で見せる児童の姿の中に道徳授業の真理（真髄）のようなものを見つけていく、いわゆる帰納法的な研究手法が都小道研の研究には向いているのではないかと思うのです。このようにして見つけたよい授業に共通する要件を分

析・整理して、今度はそれを演繹法的な手法を用いて授業で実証してみるという研究が都小道研には合っているのではないかと思っています。つまり、「児童の姿で授業を語る」、「研究の中心には常に児童がいる」そういう研究です。これならば誰でも同じ土俵で研究活動を行うことができると思います。＞

この研究方法は都小道研に合っているだけでなく、道徳科の校内研究に取り組む学校はぜひこの研究方法で行うべきだと思います。

私も校長時代にこの研究方法に近いやり方で校内研究に取り組んでいたので、上記の後藤先生のお話は心に響きました。

学校には新人、ベテラン、道徳が得意、不得意、いろいろな先生がいます。先生方にはまず、道徳科授業の進め方の一般的な「型」を理解してもらいます。

そして、その先生及び学年の考えに基づいて研究授業をしてもらい、研究協議会で出た「良かった点」は次の研究授業でも継続し、「改善点」は違う方法を試みてもらう、それが学校の成果になり、財産になりました。これは後藤先生のお話にあった「帰納法的な研究手法」と「演繹法的な研究手法」に近いものだと感じました。

道徳の校内研究を柱に据えて学校経営を進めてきて本当に良かったと、本年度校長退職１０周年を迎えた今も強く思っています。

道徳の校内研究を柱に学校経営を進めていく校長がもっともっと増えることを期待しています。

昔話になりますが、平成元年度に田代敏博先生と共に当時の都立教育研究所道徳研究室で一年間、研究生として小島宏先生から研究の進め方についてご指導いただいたこと、そして指導主事になり毎年研究員の御岳合宿や初等教育指導課で研究方法について厳しく鍛えられたことなど懐かしく思い出しました。（クリックマーク付きの発表原稿、私も何回も作成いたしました。）

以上、とりとめのないことを長々と申し訳ありません。

今後とも、ご指導よろしくお願いいたします。